

前 口 上

今般、和歌山大学「教養の森」センターの年報（第1号）を刊行する運びとなりましたので、お届けを致します。ご査収を願います。このセンターが、平成24年（2012年）10月1日に正式にスタートを切ってから数えますと、現在までには足掛け四年、厳密に言えば、二年半の歳月が流れ過ぎています。が、それ以前には十年以上に及ぶ、本学の「教養教育改革」の歴史が畳み込まれていることも忘れられてはなりません。この間の経緯につきましては、いろいろ記録に留められて、しかるべき性質のものも含まれていますので、いずれ機会を改めて後日を期したい、と願っています。ともかく、このようにして本学に、昭和24年（1949年）の創設以来、実に還暦（数え年61歳）余りの時を隔てて、大学教育においては専門教育と並ぶ根幹である、教養教育の担当センターが産み出され、その最初の一声が発せられましたことに対しては、それ相應の感慨を抱かざるをえません。

この年報には、そのまま単純に、年報という外題が宛がわれていますが、いわゆる内題には、これまでヨーロッパの各大学で歌い継がれてきた、伝統的な学生歌（*Gaudeamus*）を載せておきました。大学という教育機関や、その制度が、はるか12世紀の、中世のヨーロッパで誕生し、それが現在、八百年から九百年にも及ぶ歴史を経て、世界の至る所に普及を致しましてから後も、いつも変わらず、大学の主体は「学生」（＝「学びを生きる」人）であり、また「学生」であらねばならない、という思いを込めた次第です。今回の特集には、創刊号という意味合いも兼ね、そもそも「教養とは」というテーマを掲げました。この学生歌に即して、このテーマを言い換えますならば、それは冒頭の一句（*Gaudeamus igitur*；諸君、大いに楽しもうではないか！）と末尾の一句（*Sparsos congregavit*；いざ旅立ち、また、いざ集え！）に、ことごとく集約することが可能であろう、と信じます。